

令和8年度

幼稚園だより 6月号



文京区立千駄木幼稚園

職員室のヒミツの会

副園長 矢澤 弘美

ある日の15時過ぎ、職員室に大きなホワイトボードが運び込まれました。園庭に面した窓からは、園庭開放の片付けを終え、帰ろうとしていた子どもたちの興味津々な視線が注がれます。保護者の方の促しにより、「先生たち、この後、何するんだろう?」「ヒミツなのかな」という子どもたちの声が遠ざかっていきます。

さあ、ヒミツの会、いえ、園内研究会の始まりです!

ボードの中央に、子どもたちの遊びの様子を写した写真が貼られます。「この遊びは…」と、担任が写真について説明します。ほかの教員たちは、「へえ、おもしろい」「あ、そうだったのか」「これ、廊下でもやっていたよね」など、興味をもって話を聞きます。そして、各自、付箋に考えたことを書き、ボードに貼ります。付箋に書く内容は、“教師の援助”“幼児が「やってみたい」と感じていること”“もっとうちがしてみたら?ということ”などです。付箋が出揃うと、「みんなの付箋を読んでいて、気付いたのは…」「その付箋を書いたのは、私ですが…」と話し合いが進んでいきます。写真の遊びについてだけでなく、それぞれの教員が、自分の学級や自分自身の子どもとの関わりについて思いを巡らせることで、話の内容が深まっています。

話し合いがひと段落すると、みんなで各保育室を巡ります。6学級の環境を見合いながら、工夫を共有したり、悩んでいることを一緒に考えたりします。

園内研究会が終わると、各教員は翌日の保育の準備に取り掛かります。保育室や園庭に何を出しておくか、出すタイミングはどうするか、その時にどう言葉を掛けるか、子どもたちの遊びが予想と違ったらどうするか。迷った時に、「さっきの考え方を取り入れてみよう」と園内研究を生かしています。

今年度の園内研究主題は、「大事にしよう 遊びの中の探究の芽 ~幼児の「やってみたい」につながる環境の工夫~」です。文京区教育研究協力園の1年次として取り組み、2年次となる来年は、研究発表をする予定です。

「何だろう」「やってみたい」「どうなるのかな」「こうしてみよう」「何だか面白い」など、幼児が遊びに夢中になる姿から、「探究の芽」というキーワードを導き、それを大事にしたいと考えました。先日、ブランコの隣に縄の遊具(写真参照→)を付けました。「どうやって乗ろう」「うわ、落ちちゃう」「このへんかな」と、子どもたちは、縄への跳び付き方、手や足の位置を様々に変えながら取り組んでいました。『乗ったら面白そう、』『ああやって乗ればいいかな、』『もっとうちがしたらいいかもしれない、』などの「探究の芽」によって遊びへの意欲が湧いていました。「探究の芽」を見出すことで、「幼児期の学びである遊び」をより深く理解し、遊びを支える環境の構成や援助の方法を探っていきたいと思えます。

